

1 素戔鳴尊(スサノオノミコト)

アマテラスが天の岩戸に入ってしまったのはスサノオが乱暴狼籍を働いて怒らせたためだ。そのためにスサノオは高天原から追放され、地上において出雲国でヤマタノオロチを退治したわけだ。この二つの事件は日本神話として語り継がれた有名なものであるが、古事記によればスサノオは高天原から追放される際にもう一つ悪さをしている。実はオオゲツヒメを殺してしまったのだ。なぜ殺したかというオオゲツヒメが鼻と口と尻から食物を出して他の神に進上しているところを見て、汚いと言って殺してしまったのだ。その結果、オオゲツヒメの死体の頭からは蚕、目からは稲、耳からは粟、鼻からは小豆、陰部からは麦、尻からは大豆が発生した。そして農業が創始された。[1]

このように秩序を破壊し、騒乱させるのだけど、彼の活動によって新しいものが生じて世界を変化させるような存在が神話の中に登場するのだが、このような神話の形式は日本神話だけではなく世界中の神話に見られることが知られており、それらは総称してトリックスターと呼ばれる。

トリックスター(trickster)：神話や民話に登場し、人間に知恵や道具をもたらす一方、社会の秩序をかき乱すいたずら者。道化などととも、文化を活性化させたり、社会関係を再確認させたりする役割を果たす。(大辞林より)

2 皆と同じという不安定なシステム

日本の経済が停滞している。経済の停滞というのは資産や価値が流動しないことを意味する。資産や価値が流動しないということは多数の質点系の力学として考えると平衡状態になったものと考えて良い。熱力学でいえば全ての温度が均質になってエントロピーがこれ以上増えない状態だ。なぜこのような状態になってしまうのかを座談会でも取り上げられた阿部謹也氏(2000年12月15日に京都大学で元国立大学協会会長という立場で「独立行政法人化」についての講演を行った。)の「日本社会=世間」論に基づいて考えてみる。阿部謹也氏は次のように述べている。

社会は個人から成り立つものとされている。したがって、実状はどうであれ、それぞれの個人は、社会の構造、運営、将来について責任をもつものとして意識し、行動していることになっている。しかしながら、このような意識は明治以降に輸入されたものであり、現実の日本人の多くは、社会を構成する個人としてよりも、世間の中にいる一人の人間として行動している部分の方が多いのである。世間と個人の関係について注目すべきことは、個人は自分が世間をつくるのだという意識を全くもっていない点にある。[2, pp.6-7]

個人の性格にもよるが、世間の中で暮らす方が社会の中で暮らすよりも暮らしやすく、楽なのだ。そこでは長幼の序、先輩・後輩などの礼儀さえ心得ていればすべては慣習どおりに進み、得体のしれない相手とともに行動するときの不安などはないからである。さらに世間の中での個人の位置は、長幼の序、先輩・後輩などの序列で一応決まっており、能力によってその位置が大きく変わることはあまりない。個人が世間に対して批判をしたり、不満を述べるがあっても、世間のルールは慣習そのものであり、なんら成文化されていないから、不満も批判も聞き流されてしまうのである。[2, p.7]

日本の世間の中で暮らす個人は「礼節」が大切なのであり「和をもって尊ぶ」が美德であり、周りへの気配りを重視する。この日本人の知恵は規模の小さい集団の中での平和を保つためには非常に有用だと思う。しかし、その気配りの範囲が自分の身の回りのごく小さな集団だけに限られるときに、その外部の集団との大きな矛盾を引き起こす。このような矛盾が露呈するニュースは枚挙にいとまがないが、例えば会社組織のトップが謝罪する会見で「世間をお騒がせした」と言ったり、最近の例では宅急便会社との収賄容疑で「組織に迷惑掛けた」と遺書を残した奈良警察官が記憶に新しい。

集団の中での平和を保つために最も合理的な方法は、人がそれぞれ周りと同じように行動することである。皆が周りの人と同じように行動すれば誰も「異和感」[3]を感じなくなるから心地よく感じる。しかし、それができる集団の規模は限られてくる。集団の規模が大きくなってくれば、目の届かない範囲、すなわち気配りの及ばない範囲が必ず生じてくる。また、同時に考え方や行動の差も大きく

なってくるために、諍いが起きる。そのような諍いが起きないように、大きな集団でも平和を維持できるように考え出された知恵が「個人」すなわち「社会の構造、運営、将来について責任をもつものとして意識し、行動する」という概念であり、そのような人達の集団が「社会」である。

ある夕方、鳥が藪の中から一斉に飛び出した。そして群をなして飛んでいく。一羽がある方向へ向かうとそちらへ皆が方向転換し、またしばらくして異なる一羽が異なる方向を向かったときにそちらへ皆が方向転換した。これらの鳥は皆と同じ方向へ飛ぶという遺伝的な性質を持っているようだ。この鳥の群がどこへ飛んで行くかは全く予想がつかない。渡り鳥のように自分の幸せを求めて遠くへ飛ぶという目的を達成したいのならば、一羽一羽が自分が正しいと思う方向を貫く姿勢が必要だ。

皆が周りと同じという行動原理は上に述べた夕方の鳥の群のように極めて不安定な状況を生む。皆が周りの人と同じように土地を買えば土地はどんどん高くなる。皆が周りの人と同じように土地を買い控えれば土地はどんどん安くなる。これは全く自然の摂理であり、物理的にもきれいに定式化できそうな当然の結果だ。日本の世間という構造が今の硬直した状態を生みだしている。

3 制度としてのトリックスター

平衡状態にある多数の質点系に動きを与えるには新しい質点が必要だ。均質な温度の流体に流れを生むには新しい熱源が必要だ。硬直した状況を変えたいのならば日本の世間にトリックスターを投入する必要がある。「異和感」を日本の世間に投入する必要がある。「異和感」は大きければ大きい方が良い。ただトリックスターには自分が日本の世間に刺激を与えることを意識させてはならない。自由にさせるのだ。世間で遊ばせるのだ。世間で自分のやりたいことを存分にさせることが彼らの力を最大限に引き起こさせるからだ。硬直した世間に住む人々はトリックスターに何かを欲してはならない。トリックスターはかつてアマテラスを怒らせ、オオゲツヒメを殺してしまった悪い奴だ。しかし、トリックスターが去った後をじっくり観察してみればよい。スサノオが去った後にオオゲツヒメの死体から生じた蚕、稲、粟、小豆、麦、大豆に相当するものがあるはずだ。

ところで西洋社会がこのようなトリックスターを制度として発展させたものがある。科学だ。科学者達を遊ばせることによりさまざまな技術が生まれた。ここで遊ばせるというのは科学者に好奇心を追求する時間と場所を与えるという意味である。科学者が思う存分好奇心を追求することにより、その余剰生産物として生まれたものが今残る多くの技術だ。そして科学者を社会の中で維持するシステムが大学だ。明治時代に西洋から輸入しようとした「社会」や「個人」という概念が日本では理解されていないという問題を阿部謹也氏は指摘しているが、これはそのまま「科学」や「大学」についてもそのままではまるようだ。西洋が制度化した「大学」というシステムは日本の「世間」にはなじまないが、それは元来「異和感」を持つものだからだ。それでは何故、「大学」というシステムはこれまで続いてきたのであろうか。それはおそらく「大学」という異和感が必要だという認識ではなく、西洋社会にもあるからという横並び的で世間的な発想だろう。そして、アメリカ型グローバル化の波に乗ろうという同じく世間的な発想と「大学」の異和性を小さくしようという動きが同調して、独立行政法人化されるという消極的な流れがあると僕は解釈している。そうしてトリックスターの力が削がれていく。日本神話を学び直す必要がある。

4 京大建築系の教授達

座談会では構造系、計画系、環境系の教授達に集まって頂いたが大学の運営に関わる仕事についているため日程調整が相当大変だった。座談会の始めに研究活動のスタンスを語って頂いたが、お互いに同調しているように感じた。

辻：「割とすぐに役立つことを一所懸命やっている人って結構いるんだけど、それとはちょっと違うスタンスで..」「自分のやりたいことをやる。」

高橋：「私も辻先生と良く似ていると思う。」「いろいろな現象、事象の背後に潜んでいるすぐには見えないようなものを知りたいという質なんです。」

鏑井：「僕は趣味的に研究をするというのは大学生活における一つのすごく大きな力になってる。」

確実にトリックスターだ。この方達にオオゲツヒメを殺して頂かなければならない。

参考文献

- [1] 世界神話事典, pp. 159-160, 角川書店, 東京, 1994.
- [2] 阿部謹也, 西洋中世の愛と人格, 朝日新聞社, 東京, 1992.
- [3] 山口昌男, 文化と両義性, page iii, 岩波書店, 東京, 2000.